

「真理を告げる」

ダニエル 11 : 2 - 4

Mach.7.2021

ダニエル 11 : 2 - 4 (パワポ)

Preface

2019年1月23日の朝の礼拝から始まったダニエル書の説教ですが、2年ちょっと掛かって、やっと11章まで来ました。

そして先週1週間、このダニエル書11章をざっと見て行くべきか、もしくは、1節1節事細かく見て行くべきか悩みました。

と言いますのも、11章の内容は、10章まで以上に、1節1節の持つ内容がとても重厚で、膨大な歴史的事実を内包しているがために、一つ一つを事細かく見て行きますと、結構な時間が掛かってしまうんです。

で、今日はひとまず、2-4節までの内容を見て行き、これからの進め方については、主に委ねたいと思っておりますので、もう少しの期間、お付き合いいただけますと幸いです。

Part One

まず、ダニエル書11章は、全体にかけて、未来に起こることが記録されているがために、預言書（予言書）と言われたりもします。

では、誰にとっての未来かと言いますと、一義的には、ダニエルと2500年前当時のイスラエルの民たちにとってです。

紀元前BC6世紀頃の中東世界に生きたダニエルの没後、約400年間に渡って起こる中東世界のみならず、ヨーロッパ、アフリカ、アジアに至るまでの世界情勢と、その権力の変遷について、11章は記録しています。

ただ、すべての歴史的内容を記録することは出来ませんので、取捨選択されています。

どう取捨選択されているかと言いますと、イスラエル民族に深く係わる国際情勢に関して、主に記しています。

そして、その内容が、実際に起こった歴史的事実とあまりにも合致しているがために、「未来に起こることをこんなにも的確に記すことなんか不可能なことだ。だから、この章の内容は、ダニエルではなく、ずっと後の人が、歴史的に実際に

起こったことをあたかも未来に起こったことのように見せかけて書き、それをどさくさに紛れて、ダニエル書に挿入した」というナンセンスな主張まで出るほどです。

そんな歴史的時事を記したダニエル 11 章の主な内容は、ダニエルの晩年栄えたペルシア帝国からギリシア帝国への世界情勢の移行、

そして、隆盛を極めたギリシア帝国が悲運にも 4 分割され、その 4 つの領土の中でも、際立った権勢を誇った北アフリカに位置するエジプト・プトレマイオス王朝と、中東世界からインドに至るまでのシリア・セレウコス王朝の栄枯盛衰について記しています。

特に、11 章の内容の大半を占めるのが、エジプトのプトレマイオス王朝とシリアのセレウコス王朝の熾烈な権力争いと、その世界情勢の中に飲み込まれながらも、懸命に信仰を守り通そうとするイスラエル民族の姿です。

ちょっとここで、地図を見てみたいと思います。

地図：4 分割ギリシア（パワポ）

地図の右端が現在の極東アジア（中国、朝鮮、日本）に繋がり、左端がヨーロッパで、下の方がアフリカ、そして中央がアジアとヨーロッパの文化が重なり合う中東世界です。

ギリシアは、ヨーロッパ、アフリカ、中東、アジアと、正に世界を股にかけた大帝国でしたが、このギリシアが、マケドニア、アナトリア、シリア、エジプトと 4 分割されてしまいます。

その中でも、特に権勢を誇ったのが、シリアのセレウコス王朝とエジプトのプトレマイオス王朝です。（クレオパトラ）

ダニエル書 11 章では、シリアのセレウコス王朝のことを“北の王”と記し、エジプトのプトレマイオス王朝のことを“南の王”と記しています。

そして、地中海に面した乳と蜜の流れる地であるイスラエル・カナンの地は、どの国家にとっても、最も重要な戦略要地でした。

北から攻め下って行っても、南から攻め上って行っても、ヨーロッパから海路・陸路を通して来ても、必ず、イスラエルの地を有効に攻め取り活用することが、世界制覇の必須条件でした。

イスラエル・カナンの地は、ヨーロッパ、アフリカ、アジア、そして中東世界のある意味中心地です。

世界のへそと言えるのが、イスラエルの地なんです。

だから未だに、中東和平が世界のイシューであり、イスラエルの情勢が全世界のニュースとして取り上げられるんです。

で、今日の聖書箇所ダニエル書 11：2－4の内容は、ギリシア帝国が4分割されてしまうまでの歴史的経緯について記しています。

その内容は至って簡略的ですが、かと言って、大切な核となる内容は一つも取りこぼしていないことに驚きます。

具体的に見て行きたいと思います。

Part Two

ダニエル 11：2（パワポ）

今ここで、ダニエルに現れた天使ガブリエルは、「真理を告げる」という言葉をもって始めます。

つまり、これから語ることは、本当のことであり、現実にかかることだから、真剣に聞いて欲しいと念を押します。

まず、ダニエル当時のペルシアの王であったキュロス王の後、3人の王が起こると告げます。

実際に、カンビセス王、スメルディス王、ダリウス・ヒスタスピス王と3人の王が立ちました。

そしてその後、この2章の「第四の者」に相当するクセルクセス王が紀元前 BC 486年に即位します。

このクセルクセス王は、エステル記に登場するあのクセルクセス王のことです。

また、このクセルクセス王は、先のどの王よりも裕福でした。

で、その膨大な富と力を用いて、中東世界のみならずヨーロッパまで、その勢力を広げようと進軍して行き、ギリシアに戦いを挑みます。

それも陸路で戦いを仕掛けるのではなく、海路で戦いを仕掛けるのですが、中々上手く行かず、徐々に疲弊していきました。

その隙をついて彗星のごとく現れたのが、ギリシアのアレキサンダー大王です。

そして、このアレキサンダー大王の登場について、3節でこう言います。

ダニエル 11 : 3 (パワポ)

この「一人の勇敢な王」こそ、ギリシアのアレキサンダー大王です。

弱冠20歳という若さで世界史の表舞台に登場したアレキサンダー大王は、紀元前 BC 333 年に中東の雄ペルシアを滅ぼし、陸路と海路の両方を用いて、ヨーロッパから北アフリカのエジプト、中東世界にとどまらず、インドまでその勢力を広げていきました。

アレキサンダーは、「この地上の人間が住まうところは、全て占領する」とまで、宣言したそうです。

まさに、3節にあるように「大きな権力を思いのままにふるい」ました。

あっという間に、ヨーロッパ、アフリカ、中東、アジアにまでその領土を広げていきました。

ダニエル書7章で、このアレキサンダー大王率いるギリシアのことを、「翼を持った豹」だと例えています。正に、獐猛さと素早さの両方を兼ね備えた電光石火の獣のようでした。

何の躊躇もなく、このようなユーラシア大帝国をアレキサンダー大王が築き上げることが出来たのは、ただ単純にとてつもない軍事力があったからだけではありません。

彼には使命感がありました。

ヨーロッパのみならず、中東・アジア一帯を合理的で、理性的で、学の伴う住みやすい世界を作るという啓蒙思想の使命感に溢れていました。

と言うのも、アレキサンダーは、哲学者であり、数学者であり、物理学者であり、医学者でもあった近代学問の祖と言われるギリシアのアリストテレスの一番弟子であり、アリストテレスから学んだ、唯一まことの神の存在を排除した人間賛歌に立脚した世界をこの地上に作るんだという使命感に燃えていました。

だから、その使命を達成するためには、いくらでも人を殺せますし、いくらでも侵略できますし、いくらでも征服できました。

良心の呵責どころか、“良いものを作り上げるために” 当然支払われるべき代価だという使命感に燃えて、異民族に対する殺戮と侵略に突き進んでいきました。

Part Three

でも、こんな矛盾したことがありますか？

良いものを作るという理由で、人の命が無下にされ、利用され、踏みにじられるという矛盾です。

本来、人の命を尊重することなくして、良いものなんか無いはずなのに、人の命が利用され、妄想じみた理想と目的達成のために、人をギッタギタに八つ裂きにしました。

もっと厄介なのは、人をギタギタに八つ裂きにしているという気なんか、これっぽっちもありません。

むしろ、良いことをし、教え、示していると思っています。

でも、この矛盾は、私達にとってもひと事ではありません。

私達はいくらでも、“良いものを作るという理由”で、人を道具のように扱い、踏み台にし、利用し、教え、時には殺し、捨てます。

人格を重んじない良いものなんか無いはずなのに、(なんちゃって) 良いもののために人格が軽んじられるという矛盾が、そこにはあります。

何をやるにしても、損得勘定で動いている資本主義に立脚した現代社会に生き、また、そんな世界を作り上げてしまっている私達にそのまんま、当てはまる話です。

でも、(全く) 気付きません。

職場でも、家庭でも、教育と称する現場でも、政治でも、ありとあらゆる人間関係においても、私達は、“良いものを作るという理由”で、アレキサンダー大王と同じことを日々繰り返しながら、生きています。

そのことに、気付きもせずにです。

また、世界的に見れば、今も150の国と地域で、236にも上る戦争紛争が行われていますが、

その武力衝突の背後で、その状態を巧みにコントロールしているのは、このグローバル世界にある日本を含めた物質的に裕福な国々に住んでいる住民の物質的豊かさを保つという“良いものを作るため”の犠牲ゆえの結果です。

でも、そんなこと露知らず、目の前にある今日の大変さに翻弄されながら、物

質的豊かさを、今日も、私達は享受しています。

ニュースで流れてくる世界の紛争や、貧富の差や、差別や痛みの報道は、私達とは直接関係ないように報道されがちですが、すべて繋がっています。

“良いものを作り上げるため”に、人の命を犠牲にし、踏みにじる世界に、私達は今も生きていますし、そのような流れを変えることも出来ていません。

流れは変わらず、ただ、形が変わっているだけです。

私達が身に着けているもの、食しているもの一つとっても、どれだけの人が搾取され、犠牲になって成り立っているものなのか分からないというのも、一つの事実です。

イエス様が金持ちの青年に、「あなたの財産を売り払って貧しい人たちに与えなさい」と仰った言葉ほど、この世界の有り様の核心を突く言葉はないでしょう。

Part Four

そんな世界の歴史の真っ只中に生きている私達に、主なる神様は、全く別次元の“愛”というものをお示しになりました。

その愛は、損得勘定ではありません。

人の上に立つことにも、興味がありません。

人より偉くなることにも、価値を見出しません。

知力、体力、財力、武力、ありとあらゆるこの世の力を獲得し、蓄えることにも関心がありません。

競争に勝つことにも、プライドを保つことにも、優劣をつけることにも、功績を立てることにも、目もくれません。

ただただ、愛することのみが、最大の関心であり、興味であり、価値であり、目的であり、すべてです。

そして、その愛は、命を懸けるほどの、命を捨てるほどの愛です。

妬むよりも仕え、

得るよりも与え、

裁くよりも赦す、愛です。

排除するよりも包容し、

怒るよりも微笑み、

非難糾弾するよりも同情する、愛です。

それを主イエス様は教え、体現されました。

マタイの福音書 20 : 24 - 28 (パワポ)

12弟子たちが、イエス様と3年間共にしながら、ずっと持ち続けた最大の関心事は、「だれが一番偉いのか？」ということでした。

言葉を換えれば、

どれだけ獲得し、どれだけ蓄え、どれだけ勝ち、どれだけ自分のプライドが立ち、どれだけ自分の主張を通すことが出来たのかということに、最大の関心があったということです。

そして、これらは、愛とは何の関係もないことです。

そんな弟子たちにイエス様は、

「あなたがたは横柄にふるまえることに憧れ、自分に同調してくれる人の量で自分の力を推し量ろうとしています。わたしは、そんなものには全く興味もなければ、価値も見出しません。

わたしはただ、仕えることに最大の関心があり、仕えることこそ、人が忘れ去ったすべての物事の要点であり、愛です。

そして、わたしは、あなたがたのために命を捨てるほどに仕えたいと思っていますし、命を捨てるほどに仕えることを持って愛を示します。」と、仰いました。

Part Five

今、アレキサンダー大王にも、私達にも足りないのは、愛です。
仕えるという愛です。

アレキサンダー大王は、破竹の勢いでアジアにまでその勢力を広げましたが、結局、その野望はついえました。

インドで矢を受けて、退却せざるを得なくなり、やがて、33歳という若さで、マラリアにかかり熱病で亡くなりました。

歴史には、もしもという仮定はありませんが、もしも、アレキサンダーがインドで矢に打たれていなかったら、中国、朝鮮半島、そして日本列島にまで、その侵略は至っていたかもしれません。

でもそうはならないのが、主権者であられる神の御手の中で動いている世界の歴史です。

愛を動機とし、愛を動力としていない世界征服の野望は、これまで何一つ叶い

ませんでしたし、これからも叶いません。

それこそ、神様が、私達罪人に設けた限界です。

どんなにもがいても、結局私達は、神の愛のもとにひれ伏すように出来ていません。

結局歴史は、イエス・キリストの愛を待望させるようになっているのです。

アレキサンダー大王が亡くなる前、側近が、「閣下、あなた様がお亡くなりになりましたら、どなたに国を継がせるのでしょうか？」と訊いたところ、「最も強い者に、この国を継承させろ！」と答えました。

そして、この遺言が、ギリシア帝国に大波乱を巻き起こします。

アレキサンダーには、異母兄弟の二人の息子がいましたが、どちらかの息子に引き継がせるのではなく、最も強い者に国を引き継がせるという遺言ゆえに、臣下たちが血眼になって、その座を手に入れようと争い始めました。

まずは、二人の息子を殺し、その母たち、つまりアレキサンダーの妻たちを殺し、側室も殺し、アレキサンダー一族を根絶やしにしました。

権力を手に入れようとする臣下たちによる謀略、陰謀、毒殺、暗殺という血生臭い政権闘争が繰り広げられ、アレキサンダー大王によって統治されたヨーロッパからアジアに至るユーラシア大帝国であったギリシア帝国は、カッサンドロス、リュシマコス、セレウコス、プトレマイオスという4人の臣下たちによって、4分割され、解体されてしまいました。

このことをダニエル11：4でこう記しています。

ダニエル11：4（パワポ）

血生臭い武力と洗練された知性を持って始まった、世界征服の野望は、悲運で幕を閉じ、またさらに、血生臭い武力と洗練された知性で、本来仲間同士であった者たちが、戦い、争い、殺し合いました。

これが、神を排除した人の作る世界の限界です。

どこまで行っても、人を傷つけずには、発展という野望を成し遂げることの出来ない世界に生きており、また、そんな世界を繰り返し作り続けることを辞められない私達人類です。

正に、罪人です。

今、天使ガブリエルがダニエルに告げている真理の内容の一つが、人はどこまで行っても、罪人だということです。

罪人です。人を傷つけずにはやっていけない罪人です。
だから、イエス・キリストの罪の贖いが、私たち人間には必要なのです。

Conclusion

コリント人への手紙第一 1 : 18 - 25 (パウロ)

ギリシアを筆頭に現代にまで脈々と受け継がれてきた世の知恵は、十字架につけられたキリストを前にしては、愚かであり、無力であり、真に良いものなんか何も生み出すことの出来ない無駄なあがきだと言います。

しかし、世は、キリストの十字架こそ無駄であり、無力であり、不毛であり、愚かだと言います。

でも、そんな主張こそ間違っているということを、世界の歴史が証明しています。

正に今日の聖書箇所に記載されている、ペルシア帝国からギリシャ帝国に移した権力の変遷が、崩壊し、根こそぎになっていることが証明しています。

世は嘘をつきます。でも、キリストは嘘をつきません。

嘘に塗り固められた世界で、真理を告げるその言葉に、耳を魂を傾け聞いていきましょう。

「耳のある者は聞きなさい。聞く者こそ生きる」と、イエス様も仰いました。

この真理の言葉に、聞きましょう。

お祈りいたします。

祝祷：第一コリント 1 : 20